

人の声に耳を傾ける生き方を

「そんなところでキャッチボールしていると、ガラスが割れたりものが壊れたりするよ！」

このように注意をされたら、あなたはどうしますか。恐らくそんなことはめったに起こらないから大丈夫だと思って、多くの人はキャッチボールをやり続けるのではないでしょう。不本意に、やめたり場所をかえたりする人の心の中にも、少なからずの「大丈夫なのになあ……」という思いがあるような気がします。

金曜日に破損届をもって校長室にやってきた生徒が、二名いました。事前に情報が入っていましたので、私は彼らにどんな話をしようかと考えていました。

当然ことながら、二人には「壊そう」という意思はありませんでした。ふざけていて壊したのでもありません。何気なくやってしまったことが、たまたま破損に結びついてしまったのです。したがって、「落ち着きがない」とか「軽率だ」とかいうような言葉は、今回あてはまらないと私は思いました。私たち大人にも、こういうことは十分起こりうることでと言えます。

そこで、私は彼らに次のように話しました。

「今回は『そんなこととしていたら壊れるかも』と注意してくれる人はいなかったでしょ？それは、だれも壊れることが予期できなかったということだね。君たちだけではないんだよ。しかし、仮に、そう注意してくれる人がいたら、どうしてた？その言葉でやめるのかやめないのかでは、大きな違いが生まれると思うよ。」

五時間目の授業が始まるまでの短い時間でしたので、この話をするだけで精一杯でした。彼らに今必要なのは、至らなかつた点を責めることではなく、これからどのような行動すればよいのかということを教えることだと私は考えました。最近、忠告や注意を素直に受け止められない人間が増えてきたように思います。注意されて逆上し、暴行事件に発展したと聞く度に、「またか……」とむなしくなっています。

これから生きていく上で大切なのは、人の声に耳を傾けることです。事故防止もそうですし、防災、ネットトラブル防止もそうです。その中で、感染防止がその最たるものです。

感染者が激増し、自粛が切実に呼びかけられているにもかかわらず、自ら接触を求めるかのように行動している人がたくさんいます。そういう人はやはり「自分は大丈夫だ」と心のどこかで思っているのでしょうね。「しまった！」という経験をしたくないとわからないということは、北中生には無縁のことであってほしいと願っています。

(十二月七日 記)